Rokko Catholic Church Bulletin

カトリック六甲教会 教会報

2010 10

No.466

操り人形の踊り

J. マシア

マス・コミや政治家などによって世論が操られている世の中では、「操り人形」の話が考えさせてくれる。「人形芝居の操り人形たちは意識を持っていた」とするたとえ話しである。人形たちは喜んで踊っていたが、自分たちの背中に糸がついていて、誰かが上から操っているということに気づいていなかった。ある時人形の「一人」が相手の背中についている糸に気づき、それを指摘する。そして自分も同じように糸に操られていることを相手から知らされる。自分が自由に踊っているつもりでいたが、踊らされていたのだということに気づき、操られているということを意識するようになる。そのこと自体はひとつの解放であるが、糸を切ってしまえば、動けなくなるし、勝手に踊ろうと思えばそれもできない。そこで操られていながらも、操られるままにしておかずに、多少の抵抗をしながら人形たちは自分たちらしい踊りをしはじめた。

この例えは、さまざまな形で操作されていることに気づかないで、自由でないのに自由なつもりでいるという現代人の有様を示していると言えよう。目覚めて自分たちらしい踊りをしようというのは、「意識の変革」と「解放の運動」であろう。

ところで、このたとえに導かれてヨハネ福音書 5、1-16 をみなおしたい。

イエスは身動きのとれない中風患者に声をかけ、彼を束縛する律法の代わりに、真の自由と生きる力をもたらされる。抑圧されていることに気づかず、起き上がって歩くことのできる力が自分自身にあることを知らない人々に、イエスは「起き上がって歩きなさい」と言うのである。これは、民衆を解放するイエスの行動である。

罪と定められるのは、この病人がいやされたことを喜ぶことのできなかった指導著たちである。一人の人間が目覚めるということは彼らにとって都合の悪いことだった。ベトサダの池で、38 年も病気で苦しんでいた人が、池の中に入れてくれる人を待っていた。しかし、イエスは病人の手をとって水に入れるのではなく、「起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい」と言う。「あなたが必要としているのは、水に入れてもらうことではなく、自分の病気を癒す力が自分の内にあることを信じることである」。イエスはその人に自信を持たせ、彼を解放された。

あの池の回廊には、病気の人、目の見えない人、足の悪い人、体の麻痺した人などが、大勢横たわっていた（3 節）。この象徴的な言い方によって、身動きのとれない状態から解放されるのを待つていた当時の弱い立場にいた民衆の姿が表わされている。このように、イエスがもたらす生きる力は、「社会的不正からの解放とまことの自由へ」とわたしたちを呼びかけるのである。

キリスト教の基礎知識シリーズ

今月号から始まる基礎シリーズ、多少難解な点があるかも知れませんが、皆様のニードと聖書を読むときの助けとして、少しずつ学んでいきましょう。　　主任司祭　松村　信也

【啓　　示】

神はいろいろな形で、救いの歴史における業とみ言葉を通してご自身を啓示されました。その救いの業は、み言葉の意味を証し、み言葉は業に含まれている秘儀を顕現化します。この啓示によると、神と人間の救いに関する真理は、イエス・キリストにその究極的な充満を観ることが出来ます。

啓示の語源的意味：

Ravelatio(ﾗﾃﾝ語)、α π ο κ α λ υ φ ι σ(ｱﾎﾟｶﾘｭﾌｨｽ・ｷﾞﾘｼｬ語)の示す覆い隠されているもの、それは目に見えない事物や精神的に不可解なものが開き示されることである。広辞苑によると次のように記されている。人知をもって知ることのできない神秘を神御自らが人間に対する愛ゆえに蔽いを除いて現し示されること。つまり、啓示とは、「人間にとって理解不可能な神が人間にとって理解可能になる」ことを意味する言葉である。

キリスト教における啓示の意味する基本概念：

① 言語化できない神の働きであり、それは常に人の信仰を支え、しかも人の内からそれを支える。この様な神のいろいろな働きの表示が具体化される。

② Revelatio は、単数にも複数にも使うことが出来る。沢山の出来事（複数）この現象だけを考えると不明瞭である。神の自己譲渡（単数）自分を与え、自分を示す。この神の働きがあって、それを明確化するのがイエス・キリストであり、これが中心である。

- ✧ 現実的な出会い（呼びかけ、出会い、外から来る意志）。
- ✧ 具体的であり、個別性がある。その中に無償性がある。
- ✧ 救いをもたらすもの。それを信じ、人がその中に入っていなければならない。
- ✧ 存在の全体的な解釈となる（人生の意味、宇宙万物の意義となる）。
- ✧ すべての時代のすべての人にとって、彼らに対する呼びかけとなる。
- ✧ 一切のものが計られる（止揚される）。
- ✧ 啓示があると言うことを信じることこそ、人を世界宣教へ駆り立てる。

聖書における啓示：

① 旧約聖書；神は歴史の内に働きかけ、エジプト脱出、カナン侵入、バビロン捕囚とその解放という歴史的出来事を通してイスラエルの民に啓示された。また神は預言者を通しても啓示するが、この啓示も歴史的出来事や律法についての根源的解釈である。知恵者たちの知恵も神そのものを反映し、人間の知恵を導くものは神の知恵である。神は先ずご自身を啓示される。エジプト脱出の出来事では、ご自身を解放者とし、また民と共にいる存在として啓示する。神は人間に対して、ご自身に至る道を律法という形で啓示された。次ぎに神はその民に種々の出来事を体験させ、その意義、歴史の意味、歴史における神の計画を啓示する。

② 新約聖書;イエスの業による啓示は、彼の言葉によって説明されなければ、業の啓示の意味は人々によって曖昧なままで残る。特に彼はたとえ話によって神の国の奥義を啓示する。イエスの言葉と業を通して、彼の神秘的存在の確信に迫ることができ、ここに神の啓示の到達すべき目標がある。イエス自身が神を啓示する生きた実存である。イエスの選んだ弟子たちは、啓示の受け手であると同時に啓示の伝達者である。弟子たちの存在の意義は、イエスの復活体験によって決定的となり、啓示を伝達することが使命となる。この使命を礎として、その使命を受け継ぐ共同体が教会である。

みんなの広場

対　話

人と人との交わりは、顔と顔を合わせて声で話し合うことが基本である。人間の社会が広がり複雑になるに従って、顔と顔とを合わせて交わることが難しくなった。だからといって人と人とが交わらないで過ごし、生活することは出来ない。顔と顔とを合わすことなく交わる方法が必要になる。さらに社会の複雑化が進むに従ってその多様化が必要になる。現代はこの過程の一時点である。既に電話も携帯電話が普及して、電話をしながら道を歩いている人は珍しくなくなった。インターネットを利用した情報交換も、ブログで自分の言いたいことを言うことも日常化している。

この教会にも教勢の拡大にともなって「この世」と同じ現象が生じている。教会の中で種々の行事があっても、そこに集まることが出来るのは少数、その中で互いに語り合うのは更に少数である。

理想を並べるだけでは解決にはならない。社会の現実に対応できる方法が必要である。顔と顔を合わせて対話する機会が極めて少なくなった現代、それを補う方法を積極的に取り入れることを考えなければならない。その方法は既に多々備えられているが、教会で利用されているとはいえない。その原因はいろいろあるだろうが、その根底にあるのは信仰の個人化ではないだろうか。

「“聖徒の交わり”という時、私たちは何よりもキリスト者相互の愛の交わりを意識するはずで、その愛の交わりはキリスト者相互の生活の分かち合いも含むものであるということを忘れてはならないような気がします。信仰は私と神との個人的な結びつきだけを言うのではありません。キリスト教信仰は本質的に“交わり”の要素を持っています。神そのものが“父と子と聖霊の交わり”であり、その交わりにキリスト者はあずかるのです。交わりのない信仰は、信仰を私事化する危険があります。そのような信仰はキリスト教信仰としては不十分だと言ってもよいと思います。“主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが皆さんとともに”と言う挨拶は、キリスト教信仰の本質を示すものであり、“聖徒の交わり”はそこに位置づけられる大事なものなのです。」(李 聖一「希望のアポロギア」より)

「父よ、あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人を一つにして下さい。」と、御受難を前にして弟子たちに語られた主の御言葉は、私たちのためではなかったか。

互いに交わる手段として電話は相手に迷惑をかけることが少なくない。しかし、ブログにはその恐れが少ない。ブログのアドレスを公開し、互いに交わりに利用することを積極的に考えてはどうだろうか。教会の外ではすでにグループ内で利用されていることは珍しいことではなくなっている。一般には公開しているが、教会内には公開できないということはあり得ない。対話は共通の危険を伴う。「私に対するあなたの愛が彼等の内にあり、私も彼等の内にいるようになるためです。」

9 月 12 日の「J.マシア神父のブログ“手作りの考え方”　(http://d.hatena.ne.jp/jmasia/)」を読んでいてこんなことを思った。このブログは是非、続けて読まれることを強くお奨めする。併せて前掲の「李 聖一・希望のアポロギア」(新世社 2002 年) も座右に置きたい一書である。　(三好)

行事報告

聖書朗読リレー

バス停から教会までのほんの短い坂道を上がっただけで、汗が噴き出してくる暑い日でしたけれど、六甲教会の門をはいると小聖堂からは静かな朗読の声が洩れてきて、一瞬汗がすーっと引いていくのを感じました。

リレー朗読で聖書を読みついでいくというこの場に身を置くとき、あの静寂のなかで１０分間、自分の声だけがひびいてくる緊張感は、読んでいるものが聖書であるだけに、深く自分の心にしずまっていきました。そうして信仰のきずなも途切れることなく次へとリレーされていくのでしょうか。

当日の朝、目が覚めると「ちゃんと読めるかしら？」と心配になって、ベッドの上でそっと聖書を開けてみました。そこに出てきたのは、“祈り求めるものはすべて、既に得られたと信じなさい。そうすればそのとおりになる”（マルコ１１－２４）という言葉でした。去年はちょっと暗くて読みにくかったテーブルにはライトが用意され、ご配慮に感謝しながら無事に読み終えたこと、聖書の言葉通りだったと参加できた喜びのうちに一日を終えました。（住吉教会　山際）

行事報告

婦人会例会に参加して

９月３日、初金のごミサに続く婦人会例会で、下関の細江教会から李神父様をお迎えしての講演会がありました。李神父様は昨年秋にも六甲教会をお訪ね下さり、笑いの絶えない楽しい講演会が印象深く記憶に残っております。

今回のお話の中で特に心に残った事を記したいと思います。

ヒッチコック監督の「サイコ」という怖い映画のお話から恐怖心について「虫を見ても悲鳴をあげる程　怖がりだったうら若き乙女も４０年も経れば自分の掌で虫を捻りつぶす事の出来る強さを備え、かたや逞しく凛々しい青年は４０年も経てばちょっとした事にも驚く、か弱き男性に変わってしまう。」と言うお話。私たちは思うところがあり、爆笑の渦が起こりました。こんな様子をご覧になって、神様はこれはこれでバランスが取れていて良しとしようと、にんまり下界を見て下さっているのではないでしょうか。

イエズス会のモットー「貞潔・従順・清貧」について私たちには遠い存在の掟のように感じますが、特に基準のない「清貧」とは、「少し不便な事をすること」と考えれば、私達も自分に応じた形で少しは近づけそうだと思わせて頂きました。人は自分の思い通りに行かない事が多い中で「恵み」と「感謝」を大切にすること。「恵み」とは「受け入れる事」。「恵あふれる聖マリア」のお祈りがありますが、全てを受け入れて下さるマリア様に象徴されることなのでしょう。

この日のごミサのお説教で、李神父様はご自分のお母様のお話をされました。神父様への道を選ばれた決意を話された時、お母様は心配され、身だしなみの事だけを何度も注意されたそうです。この時、李神父様はお母様がマリア様そのものに感じられたのでしょう。

楽しく和やかなお話を有難うございました。くしくもこの日は、２年半六甲教会で私達の為に働いて下さった片柳神父様が第３修練のためマニラに向けて出立されました。どうぞお体に気を付けて無事にお帰りになられます様お祈りいたします。（川合）

９月３日初金のミサ後、婦人会の例会は下関の細江教会の李神父様をお迎えして、とても愉快なお話を聞かせていただきました。神父様はお名前からも韓国のご出身です。先月、当教会で二日間に亘ってお話下さった､具 正謨神父とは対極におられるように思いましたが､アジアの香り一杯の神父様でした。

神父様方は「貞潔・柔順・清貧」をお誓いになりますが、その内で最も難しいのは清貧で、それは少し不便、少し何かが不足している状態を保つことだとおっしゃっていました。

今、幸いにも充ち足りた暮らしをしている者にとって、身の締まる思いがいたします。少し不足していると思いつつ、後は神の助けをいただき、充全な生き方が出来るよう心がけようと思います。炎暑の中、心清められる一刻を持つことが出来ました。

いつもより大勢の方々がお集まりでした。そして、ミサの中では病床にある方が快復されて、また教会にお出かけになるよう共に祈りました。（橘）

行事報告

パイプオルガンお披露目コンサートを終えて

オルガンチーム長　馬場

この度、日本基督教団東梅田教会のご好意により当六甲教会に無償でお譲り頂いたパイプオルガンを今後も大切に使わせて頂きます事を表明する目的で､感謝を込めたお披露目コンサートを開催しました。

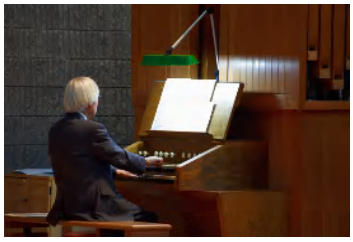
コンサート開催当日の殊の外厳しい暑さの中を遠方からも大勢の方々がお越し頂き、２５０名を超える聴衆となりました。

今回のコンサートは､永年東梅田教会で当オルガンに慣れ親しんでこられた久保田 清二先生の演奏によって、このオルガンの本領を遺憾なく発揮し、一同感銘に浸ることが出来ました。また六甲教会の 30 名を超す混声合唱団や今回のコンサートの為に編成されたアンサンブルの方々によって歌われた聖歌が聖堂に響き、聴衆を魅了し、感激を覚えました。

当日ご来場いただきました方々に御礼を申し上げますと共に、関係者の皆様がこの日の為に周到な準備をして頂きましたことに対し感謝の念でいっぱいです。

オルガン感謝お披露目コンサートを終えて～音楽が与えてくれた贈り物～

9 月 4 日土曜日、残暑厳しい日の昼下がり、オルガン感謝お披露目コンサートが行われました。ポスターや案内を見て集まってくださったお客様は、教会関係者、音楽関係者、近隣の方々など約 250 人で出演者を含めると聖堂はほぼ満員。たくさんのお客様の来場に、喜びと不安が交錯した気持ちでコンサートの幕が開きました。

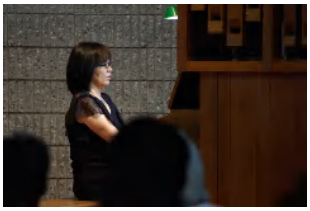


三浦優子さんの「聖霊来てください」の優しいオルガンの音色。東梅田教会久保田清二主任オルガニストの独奏は、40 年もの間このオルガンを知り尽くした演奏で存分に魅力を引き出した演奏でした。

久保田氏のオルガンの構造説明はまるでミニ講義のようで､学生時代にタイムスリップしたようでした。

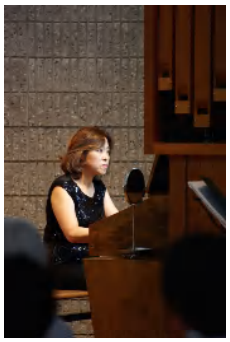
音を鳴らしながらのわかりやすい説明に、聴衆は熱心に耳を傾けていました。

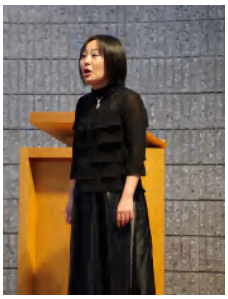
続いて「今後どのようにカトリック六甲教会で使われていくかを伝える」というコンサートの趣旨のもと、聖歌や賛美歌をオルガン伴奏で披露しました。バッハの時代から、現在の高田三郎作曲の典礼聖歌の時代まで、いつの時代も神を音楽で賛美する祈りの心は変わりません。今回、コンサートのために若い人達を交えて結成された女声合唱 CANTATE　DOMINO がバッハの時代から続いている、オルガンと聖歌との交互唱をそして浅野純加さんの独唱「ハレルヤ」で喜びに花を添えました。教会で育った若い世代の歌声は、これからの六甲教会の将来に明るい光を与えてくれました。



コンサートの中でも最も好評だったのは有志合唱団の合唱です。普段教会で音楽奉仕や音楽活動をしている様々なメンバーから 40 名。集まったメンバーは 20 代から 70 代に及ぶ男女。ふだんは顔見知りでも、あまり会話を交わす機会のない仲間もいましたが、それぞれの歌声はお互いを支え、オルガンと調和し、力強い「主よ人の望みよ、喜びよ」が聖堂に響きました。特に宗派を超えた神への賛美ということで、賛美歌と聖歌との共通曲「ガリラヤの風かおる丘で」はことのほか好評で、こみ上げるものを感じてくださった方もおられたようです。フィナーレを飾る全員合唱「救いの道」では、300 人の祈りが音楽によって一つになり、まさに「主の教会はただ一つ」でした。

身に余る思いで、演奏させて頂いた後奏「グロリア」。今まで導いてくださった皆様、音楽を与えてくださった神様そして家族。いろいろな方への感謝の思いで演奏させて頂きました。今回、このような大きな行事を通じて、六甲教会で長年あたため育ててきた音楽の芽が確実に育っている事を実感しました。さまざまな出会いやつながりを与えてくれた音楽の大きな力に感謝。司会、運営、プログラム、いろいろな面で動いてくれた教会の皆様の機動力、活動力にも感謝。すべての物が私に音楽が与えてくれたすばらしい贈り物でした。　　オルガニスト　清水





感謝コンサートで歌わせて頂いけたことを、本当に感謝しております。温かい拍手をありがとうございました。そして、久保田先生とご一緒できて嬉しかったです。オルガンの音色が大変心地良く、自分が演奏することを忘れそうなくらいお客さんになりきって、聴きいっていました。

オルガンの構造について、大変興味深く聴かせて頂き、オルガン移設のお話では、東梅田教会の方々のご厚意と、ビルダー大久保氏の大変なご苦労、ご尽力に感謝の気持ちでいっぱいになりました。この気持ちをいつまでも忘れずに、これからも大切にご奉仕させて頂きたいと思います。声をかけてくださった三浦さん、共演してくださったすべての方々、企画・準備をしてくださった方々、当日お越しくださった皆様に心よりお礼を申し上げます。　　（独唱　浅野）

★★★★★ オルガンチームからお知らせ ★★★★★

●「オルガン演奏会」開催に先立ち、東梅田教会のご好意に対して、皆様から献金を募り、集まった献金は、当日、コンサートにお越し頂いた東梅田教会小豆牧師にお渡し致しました。ご協力ありがとうございました。

●当日、オルガンコンサートに来られなかった方で、演奏をお聴きになりたい方は、当日録画した DVD が事務所にあります。お借りになりたい方は事務所にお申し出ください。

行事報告

秋 の 墓 参

雨の予報が好天気となり、やっぱり信仰が深いからやなあ、と勝手に決め付けて長嶺墓地へ向かいました。途中は少々急坂で大変ですが、登りつめると眼下に広がる大阪湾と神戸港、背景は摩耶山、春は桜、夏は緑、このように恵まれた環境の中に教会の墓地はあります。

墓参は春、秋そして11月2日の死者の日の3回で、納骨式は春と秋の2回、共同墓地でおこなわれます。最近、共同墓地は一般の墓地より人気があります。その理由は、後の管理が安心だからでしょう。お墓を作っても、将来誰が見てくれるか、皆さん同じ悩みを持っておられます。その点、共同墓地は年３回の教会墓参があり、多くの方がお参りをされるのでお花が絶えない、など多くの安心感があります。

松村司祭にとって２回目の墓参、納骨式の後は漏れなくすべてのお墓を聖水で祝福されました。ありがとうございました。本当にここに御霊が居られるのかどうかはさておき、墓参の後はいつもすがすがしい気持ちになります。多分ご先祖のねぎらいかもしれません。　”よう来てくれはったなあ”

（墓地委員会 S.F）

9 月 12 日（日）
共同墓地にて

行事報告

雨宮神父の聖書講座に参加して

9 月 25 日（土）と 26 日（日）の午後１時半から４時まで二時間半、合計五時間、養成部主催の雨宮神父の聖書講座が今年度も開催された。参加人数は 100 名程、当教会の信徒をはじめ近隣の教会、そしてプロテスタント教会からの参加者も幾人か聴講された。

現在、雨宮神父はＮＨＫ教育テレビ「こころの時代」の一時間番組を放映中であり、聖書のメッセージを通して全国の人々にキリスト教を伝えている。また当教会でも５年前から毎年土曜日と日曜日の両日に聖書講座を開催している。

雨宮神父は日本の神学者の中で有名な聖書学者、“彼の右に出る人はいない”と言われるほど偉い聖書学の先生である。にもかかわらず、とても謙遜で人当たりもよく物静かなお方である。先生に対する神学生時代の思い出は、初めての講義の時、いきなりヘブライ語のプリントを学生に配布し、ヘブライ語で講義を始めたことであった。当時、ヘブライ語の「へ」の字も知らなかった学生は、受け取ったヘブライ語のプリントを逆さにもち、解ったフリして先生の話すヘブライ語に酔っていた。その時、突然「君たちプリントが逆！」と言われ「はぁ？？」と返事したのを昨日のように思い出す。その先生にまたお話しを聞かせて戴けることに喜び、感謝しながら拝聴した。

今年度は昨年に続き「申命記」の四章から講義がはじまった。はじめ先生の淡々とした口調について

行けずに、つい睡魔が邪魔をしたが、次第にその波長に慣れるにしたがって、申命記の“時代を超越したメッセージ”に皆、聞き耳を立てるようになった。一人で読むとき「眠り薬」になるような旧約聖書が、雨宮先生の解釈を聞きながら聖書を読むと「なるほど！」と“目から鱗”が一杯落ちて、ついつい先を読みたくさせる旧約聖書と変わる。

聖書を読むとき「必ず、その時代背景を見る」ことによって、そこで語られる言葉の示す意味を捉えることが出来ると言う。例えば、申命記の中に「今」という言葉が７０回も出てくる。それはただ単に「今・今日」と言うことではなく「聞け、今」と言うことで自分の状況に合わせて聞くことではない。当時、バビロン捕囚の時代であった。したがって、「イスラエルよ、今、わたしが教える掟と法を忠実に行いなさい。そうすれば・・・・」と訳された文章ではなく、「イスラエルよ、“聞け今”、わたしがすでに教えた掟と法を忠実に行うために」となり、人はついつい過去のことを背中において未来を目の前に置きたがる。しかし、それとはまったく正反対であって、背中に未来をそして、目の前には過去の事柄をおいて、それらをじっくり見るとき自ずと過去の中に誰かが今に導いてくれたかを教えてくれる、否、気づかされる。その時、人は未来に希望を持って生きることが出来ると言う教えである。丁度“進行方向に背を向けて、ボートを漕ぐ人”のようになる（神に委ねるとはこの事だと）。

また他の聖書の中には、「主があなたを訓練する」という「訓練」の意味は、人は皆、銀や金が増し、財産が豊かになって、心おごり、あなたの神、主を忘れるから、主はあえて人に“貧しさ”を体験させるのである。そうすることは人間にとってよい状態になることである。 また“荒れ野”は、人を寄せ付けない場であるから、命の支えとなる者が誰であるかを知らせる場所でもある。そうした訓練を神は、あえて人間に求めるのである。それは言うまでもなく、「神が行う試みは、神の道に一層密着して生きるようにと、人を鍛えるための手段となるから」である。

他にも沢山、聖書を読むときの助けとなる示唆を“申命記”の解釈から頂戴した。“申命記”は、真に時代を超えたメッセージを語っていると同時に、祈りの根源をも伝えていることを、教えられた。今回、残念ながら出席出来なかった皆様へ是非、次回の講座に参加され、聖書を読む楽しみを増やされては如何でしょうか。　　（主任司祭　　松村　信也）

旧約聖書公開講座「申命記」を聞いて

イエスがヨハネから洗礼を受けた後、荒れ野での悪魔の誘惑を撃退した言葉が「申命記」からのものであるというのをいつか聞いたことがあり、一度勉強してみたいと思っていたので、今回は良い機会を与えていただいた。その言葉は、石をパンにしてみろと言われた時の『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る１つ１つの言葉で生きる』(→申 8･3)、神殿の屋根から飛び降りたらと言われた時の『あなたの神である主を試してはならない』(→申 6･16)、全世界を与えようと言われた時の『あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ』(→申 6･13) である。イエスが「申命記」を含むトーラーを諳（そら）んじていたことは想像に難くない。

さて雨宮神父の講義は、詳しくもわかりやすいレジメが用意されており、ヘブライ語に基づいての意味の理解、聖書学的な時代考証による文節の理解と成立年代の推定等を交えて、穏やかに、ゆっくりと、明解な説明であった。目からウロコの連続で、「申命記」の凄さと旧約聖書の面白さ、奥深さを教えて頂いた。私の感じた凄さの一つは、モーセの遺言という形ではあるが、「申命記」が完成するまでには、モーセの時代からバビロン捕囚の時代という数百年の長年月の激動の歴史を通して、イスラエル民族の血と汗と涙の結晶として出来上がったことである。国を失くしたイスラエルの民族が、そのアイデンティティーの源として「モーセの遺言の掟」に立ち帰るという、歴史の連続性と選ばれた民であることの信仰に驚いてしまう。

もう一つは、「ヨルダン川東岸」（現在）に立ち、過去に背後の荒れ野で不平不満の態度を示したにもかかわらず、目の前に乳と蜜の流れる約束の地（未来）が示されているという設定は、どの時代の誰にも当てはまると教えられたことである。「申命記」が、過去、現在、未来を通しての神の救いの計画を示し、未来に向ってどの道を選ぶのか問うていると教えられたように思い、そのスケールの大きさ、奥深さに感動である。

講座の 9 月 25、26 日とも好天に恵まれ、六甲教会のみならず近隣のカトリック、プロテスタントの多くの教会から参加者があった。この 10 月から NHK 教育テレビ「こころの時代」で雨宮神父の「福音書のことば（下）」が始まる。日本を代表する旧約聖書の第一人者による六甲教会での講義であり、聞き逃された方は残念至極である。（K．M）

📖 図書紹介

「イエスとマリア（聖性のみなもと）」

ヘンリ・Ｊ・Ｍ・ナウウェン著　佐藤みさほ訳（女子パウロ会発行）

♪キリストのように考え、キリストのように話し、キリストのように行い、キリストのように愛そう

聖歌を思い出して、そのように出来たらすばらしいこと、自分の力では不可能‥でもそれを望み呼んでいらっしゃるイエス様、この様な事を思っている時に、この本に出会いました。

「ご自分で手をとって、ご自分のみ子とのより深い一致へと導く優しい案内人マリア様」ご自分の体験から話しておられるこの本を読んでいると、頭で考えるのではなく、素直に、単純に祈る時、聖書を読む時、ごミサに与る時に出会ったイエス様、マリア様が教えて下さっていることを改めて気づかされました。私にとって霊的指導をしていただいている様な思いになる本でした。

「主の美しさを仰ぎ見よ　ーイコンとともに祈る」　**Ｈ･Ｊ･Ｍ･ノーウェン著　沢田和夫訳（新世社）**

この本は４つのイコンの事が書かれています。

聖三位一体イコン～愛の家に生きる～　／　ウラディーミルの聖母のイコン～神に所属する～

ズベニゴロードの救世主イコン～キリストを見る～　／　聖霊降臨イコン～世を解放する～

この中の聖三位一体イコンが好きでよく眺めていました。ある時、中央に座っていらっしゃるのがイエス様と知り、何故この順番に座っていらっしゃるのかしらと思い続けていました。

この本に出会って深い意味を知り、ますますイコンに心がひかれています。イコンが心に浮かぶと聖書のみことばが心に浮かび、神様が話しかけて下さっている様に、聖三位一体の交わりの中へ招いて下さっている様に感じるのです。書店でこの本を紹介して下さった一人のシスターに感謝しています。

（藤井）

∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞ 各 部 だ よ り ∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞

壮年会

10 月 17 日(日)11:30～14:00「大いに語ろう会」
昼食準備します。
壮年会以外の方の参加も大歓迎。

婦人会

10 月 1 日(金)初金ミサ後、婦人トップ会
10 月 3 日(日)～31(日)までバザー蚤の市の
寄贈品を集めます。未使用、新品の物品、
賞味期限のある食品などに限ります。
10 月 9 日（土）より バザーの食券を販売します。

教会学校

10 月 2 日(土)通常クラス
10 月 9 日(土)通常クラス
10 月 16 日(土) バザー準備クラス
10 月 23 日(土)通常クラス
10 月 30 日(土)休み

社会活動部

11 月 5 日(金)10 時ミサ後　連絡会

《 お知らせ 》

★社会活動部より★

10 月 ６日（水）10：00　手芸の集い
10 月 ９日（土）10：00　炊き出し
10 月 17 日（日）10 時ミサ後、ミニバザー
10 月 25 日（月）9：30　ともしびケーキづくり

★養成部より★

10 月 23 日（土）10：00　「祈りの道場」
指　導：　英　隆一郎 神父
テーマ：アシジのフランシスコ
参加費：６００円（昼食代として）
締　切：10 月 18 日（月）

☆ 教会大掃除 ☆

10 月 9 日（土） ９：３０～
教会大掃除を行います。
多くの方のご協力をお願いします。

☆ 主日ミサの時間 ☆

10 月以降も主日ミサは **7：00、10：00** です。駐車場が込み合いますので、公共交通機関をご利用下さい。

◆◆◆

この様な場をいつも準備してくださっている三日月会のメンバーの方々を始め、陰でお手伝いしてくださっている婦人会の有志の方々に心からお礼申し上げます。彼らの地道な奉仕の積み重ねが、今日の人と人との“つながり”、連帯の輪を築いてくれます。

派手な打ち上げ花火は大勢の人々を魅了し、一見大きな力に見えるような集いであっても、花火の音と共に消え去っていきます。そのために、派手好みな人はいつも一時の刺激、楽しみだけを求め彷徨う果てには、何もない砂漠の中にとり残された自分に気づき悔やむのです。派手な花火とは対照的に地味な活動、目立たない奉仕ですが、人と人との交わりの場をいつも共同体のために準備されます。“自分のためにではなく人のために”との思いから始められた三日月会の喫茶は、みんなの新たな出会いの場、さらにお茶とお菓子が花を添え、その和が互いの“つながり”を築いていくのです。この素晴らしきかな三日月会の“交わり喫茶”、あなたも一緒にいかがですか。

月一回の三日月会の“交わり喫茶”は、今、横割りから縦割りへの“つながり”と変わりつつあります。この現象は、明日の共同体に大きな力と変化をもたらすでしょう。またこれを契機に、若者たちも“交わり喫茶”三日月会への奉仕にご協力をして戴き、いつまでも“交わり喫茶”三日月会を存続させて活きましょう。

是非、お元気な皆様！“交わり喫茶”三日月会のボランティアに参加してみませんか。

あなたの奉仕が、明日の共同体の大きな礎になるために。　　主任司祭　　松村 信也

あちらこちらのテーブルで話に花が咲く。共同体のコミュニケーションの場は今日も賑わう。

宣教を考える集いⅡ

日時：**１０月３０日（土）10：00～16：00**

ぜひ大勢の方の参加をお待ちしています。
宣教活動ではなくて、私の信仰とは、
信仰共同体とは、をご一緒に考えましょう。

対象者：**六甲教会の信徒の皆さま**
プログラム：**お話、祈り、話し合い、ミサ**
会費（当日）：**500 円／一人**（昼食代を含む）
100 円／一人（お弁当持参者参加費）
持参品：筆記具

広報部員のつぶやき

先日、松村神父様からお借りした、NHK のドキュメンタリー「無縁社会」の DVD を見た。今、日本社会では孤独死が増えている。家族、親類そして社会からも孤立した人たちが、誰にも気づかれず亡くなっていく。そして遺骨は無縁仏として処理される。高齢化社会になっていくと、増々このような「無縁社会」が広がっていくのだろうか。教会内でも今、地区の重要性が言われているが、まさしく地区での日頃の関わりが、社会の空洞化を無くす解決策の一つだと思う。

今日も私が勤める病院では、73 歳の息子さんが 101 歳の母親のお見舞いに来られていた。夕食の介助をしながら、話しかけている姿が微笑ましい。その息子さんは「老々介護ですわ。」と笑っておられたが、無縁社会の広まりの中で心温まる一つの光景であった。（T.H）

教会報11月号の発行は、10月31日（日）です。
編集会議は10月24（日）です。
記事原稿は、10月17日（日）正午までに信徒会館受付へご提出願います。（広報部）
http://www.rokko-catholic.jp

カトリック六甲教会
〒657-0061　神戸市灘区赤松町 3－1－21
電話　078－851－2846
発行責任者　松村信也
編集　広報部